

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）

難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究

分科会総括研究報告書

自己免疫性肝炎に関する研究

研究分担者 大平 弘正 福島県立医科大学消化器内科 主任教授

A. 研究目的

当分科会では、自己免疫性肝炎（AIH）に関する全国・班内調査結果および科学的根拠に基づいて診断指針、重症度判定、診療ガイドラインの改訂を行うことを目的とする。分科会では以下の5項目について調査研究を予定する。

- 1) 全国疫学調査および全国実態調査（成人および小児）（田中篤、藤澤知雄、大平弘正）
- 2) 急性肝炎期 AIH の診断指針の策定（吉澤要、姜貞憲、原田憲一、常山幸一、鹿毛政義、中野雅行）
- 3) 重症度判定基準の再評価（鈴木義之、中本伸宏、小池和彦、銭谷幹男）
- 4) 重症 AIH の治療指針の策定（阿部雅則、高木章乃夫、鳥村拓司）
- 5) AIH の QOL 調査（大平弘正）

B. 研究方法

全国疫学調査については、調査担当施設である帝京大学において倫理委員会での承認を得たのち、一次調査票を作成、発送・回収する。成人および小児AIHの全国実態調査については、調査票を作成するとともに、調査担当施設である福島医科大学および関連施設倫理委員会において調査についての承認を得る。

急性肝炎期 AIH の診断指針作成については、AIH 以外の急性肝炎例の臨床データおよび肝組織所見について集積を分科会および班内で実施する。

重症度判定基準の再評価については、全国調査（調査票に新たに PT-INR を追加する）および急性肝不全データを踏まえて検討する。

重症 AIH の治療指針の策定においては、劇症肝炎分科会データを供与頂き、現状の治療実態を把握し、方向性を検討する。

AIH の QOL 調査のサブ解析では、前回調

査データも参考として、ステロイド治療に伴う骨粗しょう症、サルコペニアの実態調査を分科会・班内で予定する。

（倫理面への配慮）

調査にあたっては、各施設の倫理委員会の承認を得てから実施する。

C. 研究結果

全国疫学調査については、調査担当施設である帝京大学において倫理委員会での承認を得たのち、一次調査票を作成、発送・回収し、2次調査票を作成、発送予定である。実態調査も倫理委員会の承認が得られ、2次調査に併せて、調査票を送付予定である。

急性肝炎期 AIH の診断指針作成については、臨床上の特徴として慢性の AIH 例と比較して ALT が高値、抗核抗体陰性、IgG 基準値内の症例がみられ、胆道系酵素が高い症例で再燃が多いことが示唆されている。また、病理学的所見では急性発症 AIH で高頻度に見られるものの、薬物性肝障害では出現率が低い所見として、エンペリポレーシス、形質細胞浸潤、肝細胞敷石様配列、肝細胞腫大変性、多核肝細胞が挙げられた。重症度判定基準の再評価については、現在項目に含まれる肝実質の不均質化、AST、ALT は予後との関連が乏しいことが示唆された。一方で高齢者、MELD スコア、感染症の合併の有無が予後と関連している。重症 AIH の治療の現状については、多くの症例で副腎皮質ステロイド治療が行われステロイドパルス療法も約 70% の症例で行われていた。また、昏睡出現前の早期からステロイドパルス療法などの適切な治療を行うことが重要である可能性が示唆された。

他の調査研究においても、調査票の作成と倫理委員会の申請を行った。

D. 考察と結論

今後も他分科会との調整も図りながらデータを集積し、最終的なガイドラインの改定に向けて解析を進めていく予定である。